

## 『瑜伽師地論』における vastu と nimitta の関係

——三性説との関係において——

本 村 耐 樹

1. はじめに 唯識学派は、凡夫の雑染から清浄への転換を説明するために三性説と呼ばれる理論を用いた。三性とは遍計所執性 (parikalpita-svabhāva)、依他起性 (paratantra-svabhāva)、円成実性 (pariṇiṣpanna-svabhāva) である。そしてその中で依他起性はアーヤ識と対応され、そのアーヤ識としての依他起性を中心に他の二つの自性が関連付けられていると一般に考えられている<sup>1)</sup>。これに対し、筆者はこれまでに、『中辺分別論』における三性説について考察し、そこでは三性説が依他起性ではなく、円成実性を中心とする構造として説かれているという解釈を示した<sup>2)</sup>。

本稿は、『中辺分別論』のような三性説の構造がどこに由来するものなのだろうかという問題意識のもと、『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi, 以下『瑜伽論』と省略)「本地分・菩薩地」(BBh) および「摂決摂分・菩薩地」(VinSg) それぞれの「真実義章」における〈事〉(vastu) と〈因相〉(nimitta) の概念<sup>3)</sup>を通して、『瑜伽論』の三性説を考察し、『中辺分別論』と同様の三性説の構造が『瑜伽論』の当該箇所にも説かれていることを明らかにする<sup>4)</sup>。

2. 〈事〉と仮説 「本地分」中「菩薩地・真実義章」において、諸法が本来的に言葉の仮説を離れたものであることと、菩薩の法無我の智によって「〈事〉のみ」「真如のみ」を把握することが説かれる<sup>5)</sup>。その際、「菩薩地」はよく知られた『小空経』の引用によって<sup>6)</sup>、正しい空観において何らかの「余れるもの」の認識があることを示す。そして、その「余れるもの」については次のように言われる。

また、その「色」等と名付けられた〈事〉において余れるものとは何か。実にそれは「色」等の仮説の拠り所である<sup>7)</sup>。

即ち、「色」等と仮説された存在において、「色」等の仮説は存在しないが、そこに余れるものとして、仮説の拠り所が存在すると言われるのである。つまり、「色」等と仮説されるものにおいて、仮説（「色」等の言語表現）は存在しないが、その仮説の拠り所は存在するというものである。本来『小空経』では、例えば、

「ある講堂に象等は存在しない（空）が、そこに余れるものとして比丘サンガは存在している（不空）」という形で提示されるように、基体ではなく、それを抛り所とするものの存在／非存在が問題となっていた。しかし、『瑜伽論』ではそれを、ある基体を抛り所とするものは存在しないが、そこに余れるものとして、その基体となっているもの自体は存在すると読み替えたのである<sup>8)</sup>。この読み替えから、『瑜伽論』が、元来『小空經』では前提とされていた基体（講堂等）の存在を「余れるもの」として積極的に提示した。そして、その「余れるもの」が〈事〉とされるのである<sup>9)</sup>。以上「本地分」における〈事〉について考察したが、「本地分」では〈事〉に重心が置かれ、その〈事〉とそれを基体とする仮説という二つのものの関係が主題とされている。

### 3. 〈事〉と〈因相〉「摂決択分」中「菩薩地・真実義章」において真如と〈事〉について、次のように説かれる。

真如とは何か[という]ならば、法無我として顕現したもの、聖者の智の対象としての、一切の言説の基体たるものに関して、基体となっていない状態の〈事〉のことである<sup>10)</sup>。

ここでは、真如と〈事〉が同じものであり、言説の抛り所となっていない基体であることが分かる。そして〈因相〉について、

〈因相〉とは何か、略すなら、言説の抛り所となっている〈事〉である<sup>11)</sup>。

と定義され、また、

〈因相〉は世俗有であると言われるべきか、勝義有であると言われるべきか[と言う]ならば、答える。世俗有であると言われるべきである。二つの理由からである。雑染なものとして起るゆえに、また、仮有なる抛り所であるゆえに<sup>12)</sup>。

と説かれる。この記述から〈因相〉は、言説の抛り所の状態にある〈事〉であり、雑染で、仮有なる基体であることが理解されるであろう。したがって〈事〉と〈因相〉は共に基体としての位置づけがなされているが、〈事〉は言説の抛り所となっていない、聖者のみのよって知られる「余れるもの」としての基体であるが、それが言説の抛り所となっている場合、それが〈因相〉と呼ばれるのである。「本地分」では仮説と〈事〉の二つの関係が説かれたが、「摂決択分」では、そこに〈因相〉という三つ目の概念が導入されているのである。

さらに「摂決択分」では、真如、即ち〈事〉と、〈因相〉が三性にあてはめられ、前者を円成実性に、また後者を依他起性に含めるという議論が後続する<sup>13)</sup>。その記述をもとに、先の〈事〉と〈因相〉の関係を三性にあてはめると、〈因相〉

とは言説の拠り所となっている〈事〉のことであつたので、同様に、言説の拠り所となっている円成実性が依他起性であると考えられよう。「本地分」[撰決択分]ともに〈事〉に重心が置かれて説かれていたように、三性説においても円成実性に重心が置かれて説かれていると考えられるのである。

また、このような円成実性を基体とする構造は次の箇所からも窺い知れる。

〈因相〉と真如とは異なると言われるべきか、異ならないと言われるべきか[と言う]ならば、答える。二つとも言われるべきではない。それはどうしてか。二つとも矛盾があるからである。異なっているならば何の過失があるのか[と言う]ならば、〈因相〉の勝義は真如ではないことになってしまう<sup>14)</sup>。

ここでは〈因相〉と真如が不一不異であることが言われるが、その理由として、それらが異なるとき、〈因相〉の勝義が真如でないことになってしまうと説かれている。即ち〈因相〉と真如(〈事〉)は同じ言説の基体であるが、〈事〉は勝義としての基体であり、〈因相〉は世俗的なものとしての基体なのである。以上のような記述からも、〈事〉は基体に位置づけられるものであり、その基体が言説の拠り所となった時、同じ基体であっても〈因相〉という世俗的なものとなるということが分かる。三性説の構造を考えた場合、もし基体が依他起性であるならば、円成実性は「依他起性において言説の存在しないこと」という概念的なものとなってしまう<sup>15)</sup>。このようなものが円成実性であるならば、円成実性は決して言説の拠り所とは言われまいであろう。しかし、以上見てきたように、『瑜伽論』では円成実性としての〈事〉は「余れるもの」、即ち言説の勝義的な意味での基体とされているのである。そして〈因相〉は「仮有なる拠り所<sup>16)</sup>」と言われたように、言説の拠り所となっている〈事〉であり、勝義として実有なるものは真如、即ち円成実性としての〈事〉のみなのである。

以上の考察から、〈事〉は基体に位置づけられること。また、〈事〉と〈因相〉は同じ言説の基体として説かれてはいるが、異なったレベルのものであること。そして、三性説の構造は〈事〉、すなわち円成実性を基体としたものであり、それが言説の拠り所となったとき、依他起性としての〈因相〉と呼ばれるということが明らかとなった。そして、このような円成実性を基体とする三性説の構造が『中辺分別論』にも見られることから、『瑜伽論』の三性説は『中辺分別論』へも影響を与えていると考えられるのである。

---

略号およびテキスト BBh: *Bodhisattvabhūmi*, ed. U. Wogihara, Tokyo, 1930. VinSg:

*Viniścayasamgrahaṇī*, P No. 5539, D No. 4038.

- 1) 長尾雅人 [1988]: 「世界観としての三性説」『日本学士院紀要』43 (1): 1-19 など.
- 2) 拙稿 [2004]: 「『中辺分別論』における虚妄分別と三性説の関係」『東海佛教』49: 65-76. なお, 川口 [2001]: 「初期唯識派の三性説の一考察 ヴァスバンドゥの三性説 (二)」『日本佛教學會年報』67: 71-92 は, パーヴィヴェーカ等が三性説を二諦説によって解釈していることを示し, 実際に唯識の論師が三性説をどの様に把握していたのかという問題意識のもと, Vasubandhu の三性説を考察している. そして Vasubandhu の三性説は円成実性のみを勝義的存在とするものであることを述べている.
- 3) 『瑜伽論』の vastu と nimitta については阿理生 [1982]: 「瑜伽行派 (yogācāra) の問題点—唯識思想成立以前の思想的立場をめぐって—」『哲学年報』(『荒木見悟名誉教授退官記念論文集』) 41: 25-53 および, Takahashi, Koichi [2001]: “*Vastu in the Tattvārtha Section of the Bodhisattvabhūmi and the Viniścayasamgrahaṇī*” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 49 (2): 39-41 参照.
- 4) 「摂決摂分」の三性説の構造については池田道浩 [1996]: 「三性説の構造的変化 (1)」『駒沢大学大学院仏教学研究年報』29: 1-15 がある. また, Vasubandhu の三性説と『瑜伽論』の関係については川口輝夫 [2001] 参照.
- 5) *BBh*, p. 41, 15-18.
- 6) *BBh*, p. 47, 17-19.
- 7) *BBh*, p. 47, 23-25.
- 8) 例えば, 阿理生 [1983]: 「瑜伽行派の空性と実践」〔付録〕*Mahāyānasūtrālamkāra* 梵文写本対照表『哲学年報』43: 55-90. 特に, 第三節に詳しい. また池田 [1996: 8-9] も参照.
- 9) これについては阿 [1983: 60] に詳しい.
- 10) *VinSg*, P Zi, 302b4 (D Shi, 287b3-4).
- 11) *VinSg*, P Zi, 302b3 (D Shi, 287b2).
- 12) *VinSg*, P Zi, 303b7-8 (D Shi, 288b7).
- 13) *VinSg*, P Ħi, 24a8-24b2 (D Zi, 22b1-3).
- 14) *VinSg*, P Ħi, 2b1-2 (D Zi, 2a1-2).
- 15) 池田 [1996: 8].
- 16) 本稿註 12 参照.

〈キーワード〉 *Bodhisattvabhūmi*, *Viniścayasamgrahaṇī*, 五事, 三性説.

(名古屋大学大学院)

try to establish the relationship between the MMT and the *Devīmāhātmya* (abbr. DM), a basic Hindu text of worship of the Goddess, through the analysis of the word “brahmāṇḍa” in the MMT (chap. 1, verse 4) and in the DM and of some adjectives used to describe the deity, Mahāmāyā (MMT chap. 1, verse 4-6). According to my hypothesis, the MMT was composed between the eighth and eleventh centuries.

**80. On the Āditajātaka from Palm Leaf Manuscripts kept in Otani University: A comparative study with the Burmese (Zimmé) and Northern Thai (Lanna) recensions**

Hiroyuki MURANISHI

There exist at least three recensions (Burmese, Laotian & Cambodian) of the *Paññāsajātaka*, which is a collection of 50 non-canonical jātakas unique to South East Asia. The Burmese recension was published first in 1981 by P. S. Jaini in the PTS series (No.172) as “*Paññāsa-Jātaka or Zimmé Paññāsa*”. In 1998, Chiang Mai University edited and published “*A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*”. Otani University has long held many palm-leaf manuscripts in Khmer script, in which we found 27 stories originated from *Paññāsajātaka*. Here, I make a comparative study of the Otani version of the Āditajātaka with the equivalent story in the Burmese recension: Ādittarājajātaka (No.1) and the Northern Thai version: Ādittarājajātaka (No.43). The Āditajātaka is a story of gift-giving (dāna). The king Ādita gives his beloved queen to a Brahman hoping that he will be a buddha in future. The author seems to have composed this story based on the famous Vessantarajātaka (No.547). Comparing these four texts, I conclude that the Northern Thai version seems to show the oldest style and image of the *Paññāsajātaka*.

**81. The Relationship between *vastu* and *nimitta* in the *Yogācārabhūmi***

Taiki MOTOMURA

*Vastu* appears as the base of verbal denominations and as a verbally inexpressive thing in the *Yogācārabhūmi*, especially in the *Tattvārtha* Chapter of the *Bodhisattvabhūmi*. In the *Viniścayasamgrahaṇī*, *nimitta* appears in the same position as *vastu*. Furthermore, these are connected with the Three-nature Theory. In this paper, I have tried to investigate *vastu* and *nimitta* in the connection with the Three-nature Theory.

I have investigated the Three-nature Theory in the *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* before. From that investigation, I found that the structure of the Three-nature Theory in the *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* is different from that in the other texts of the *Yogācāra* School. Generally, the structure of the Three-nature Theory is thought to be that *paratantra-svabhāva* is a locus of *parikalpita-svabhāva* and *pariniṣpanna-svabhāva*. But in that text, that locus is *pariniṣpanna-svabhāva*. In my opinion, Vasubandhu, who is the author of that text, may possibly be influenced by another text which was written before the *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*. Through an investigation of *vastu* and *nimitta* in the *Yogācārabhūmi*, it appears that there is a possibility that Vasubandhu was influenced by the Three-nature Theory of the *Yogācārabhūmi*.

## 82. The Position of Vajrasattva According to the *Mahāvairocanaṅghisambodhi-vikurvitādhiṣṭhānaśāstra*

Tatsuto HIRAOKA

## 83. On the *Kāyatrayastotra*

Akimasa TSUDA

The *Kāyatrayastotra* (P no.2015) may be supposed not to have been written by Nāgārjuna, considering the meter, *Sragdharā*, and the terms for *Trikāya*, the set of which is not yet seen even in the earliest *Yogācāra* works, i.e. the *Bodhisattvabhūmi* of the *Yogācārabhūmi*, the *Samdhinirmocanasūtra* and the *Viniścayasamgrahaṇī* of the *Yogācārabhūmi*. It is possible, although we cannot prove it conclusively, that this *stotra* was composed before the estab-